

# 『金瓶梅』にみられる住まいの空間構成に関する研究 「隔」の要素としての屏風について

藤原美樹\* 石丸 進\*\* 松本静夫\*

Study on the Room Arrangement in the Novel "JIN PING MEI".  
Focusing on the Screen as an Element of Partition.

Miki FUJIWARA\* Susumu ISHIMARU\*\* Shizuo MATSUMOTO\*

## ABSTRACT

This paper aims to make clear roles and functions of screens in the novel "JIN PING MEI". As a result, next six points become clear: 1) A screen in its origin has a function as a barrier or a shield to protect a human body. However, screens are generally considered furniture in these days. 2) In the novel there are screens called "mo", "zhàng", "ru ā n bì". In general "ru ā n ping" is made of cloth and considered "partition". 3) Also it is called "zuo pin feng (screen)", but different from Japanese style screen "ru ā n ping" presented from Japan in the Ming period. 4) Screens are classified into these four ones following their forms: "small table screen(xi ā o zuò píng fēng)", "screen(zuò píng fēng)", "folding screen(wéi píng)", "hanging screen(diào píng)". 5) Screens are regarded as precious handcrafts, so it is considered that possessing lots of them means a status symbol and wealth of a family. 6) Each place is arranged and characterized by forms, materials, designs of screens, according to social status, class and lifestyle. Therefore there is a social standard in using screens.

キーワード： 金瓶梅, 隔, 屏風, 家具, 室内意匠

keywords: JIN PING MEI, partition, screen, furniture, interior design

## 1. はじめに

本研究は、中国古典文学の四大奇書のひとつ、『金瓶梅』の記述[1]および挿図[2]を資料として、住まいにみえる空間構成とその文化的な生活についての考察を行い、中国明代の住様式を明らかにすることを目的とする一連の研究である。

本稿では、『金瓶梅』にみえる、室内の榻扇(折戸)、落地罩などの仕切り、移動可能な屏風や衣架などの家具類、架子床の帳、開口部の簾、幕などを総称して「隔」と定義し[3]、その用例のうち、「隔」の要素としての屏風について考察を試みる。

## 2. 屏風の歴史

周代末秦漢代の礼に関する記録、『礼記』の明堂位第十四[4]に、(子負斧依南郷而立)がみえ、皇帝は、「斧宸」を背に南面したことがわかる。「斧宸」は、斧の文様の屏風であり、政治的シンボルであり、権威の象徴が示され(図1、2)、この伝統は中国最後の王朝まで続

いた。式典の間、さまざまな階級の役人は式典の場所において、円陣をつくる。「斧宸」は、この場所における唯一の家具である[5]。

『金瓶梅』にみえる「九雷龍鳳宸」は、斧の文様であり、「斧宸」の文様に類似すると考えられる。形態については、後述する。

『三禮圖』卷第八[6]の一節(司几筵云凡大朝覲大饗射凡封國命諸侯王位設黼依注云黼謂之斧其繡白黑采以絳帛為質依音宸其制如屏風賈釋云諸文多作斧字若糯米色而言即續人…取金斧斷割之義屏風之名出於漢世…)に記述されるように、黼依と斧宸は同義であり、斧宸とは、皇帝の座の後ろに、陳設される権威を象徴する屏風(屏風)である[7](図3)。

また、崔豹撰『古今註』都邑第二[8]の一節(…罽罍屏之遺象也塾門外之舍也臣來朝君至門外當就舍更衣熟詳所應對之事塾之言熟也行至門內屏外復應思惟罽罍言復思也漢西京罽罍合版為之亦築土為之每門闕殿舍前皆有馬千今郡國廳前亦樹之…)では、屏風は「罽罍」、「復

\*建築学科 \*\*非常勤講師

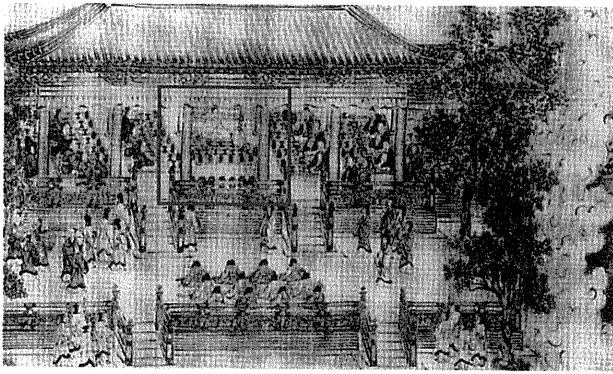


図1 《小雅鹿鳴之什》部分

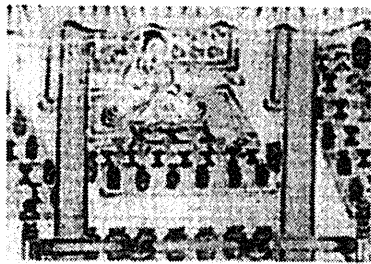


図2 図1部分拡大図

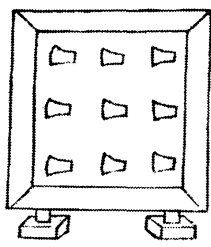


図3 宸(三禮圖斧紋屏風)

思」と表記される。諸侯が皇帝に会う際、建物に入る前に、思考する時間をもつための場所を構成していたと同時に、魔除の役割としての「影壁」の機能・形態をもつと考えられる[9]。影壁は、四扇或いは六扇の屏門を指し、照壁と同義の屏障的牆壁である。

引用文の「樹」には、儀礼時に邪気を払う意、またすべてのものを樹立、豎立(じゅりつ)するという意味がある[10]。

北宋末(1103年)、李明仲が勅命によって編修した、中国建築史上、重要な資料とされる建築技術書『李明仲營造法式』巻六、小木作制度[11]に「照壁屏風骨」截間屏風骨、四扇屏風骨の項がみえる。その一節(一曰皇邸、二曰後板、三曰宸、四曰屏風)に4つの名称がみえる。「皇邸」は、皇帝専用の屏風であり、陳設場所は座席の後ろ側であり、宸、屏風とも呼称される。

『鄭玄註』には、室内の「罍罍」は木板であり、外部の「罍罍」は、石や煉瓦が使用されていた記録がある[12]。また、宸に類似した形態である「乏」は『三禮圖』にみえる。

『三禮圖』巻第八の一節(…鄭之兩注謂獲者蔽以禦失也賈釋云容蔽其身故得禦矢言乏者矢至於…革即大射賓射等乏皆用革也)より、それは、矢を防ぎ、身を守るための革製の楯であったことがわかる。

以上のことより、場所を仕切り、風を防ぎ、装飾用として陳設される「屏風」の起源は、室内外に陳設される家具に属するものではなく、権威の象徴を示し、障壁としての機能をもつ壁、身を守るための武具であり、「楯」という起源も考えられる。

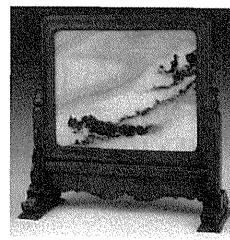


図4 小座屏風

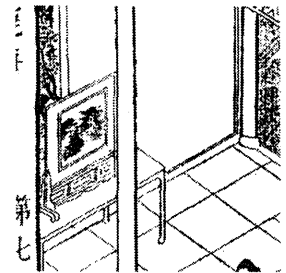


図5 大廳 小座屏風

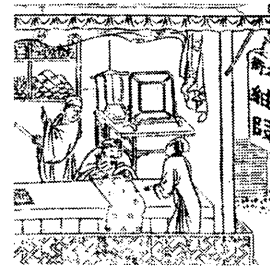


図6 緞子屋 小座屏風

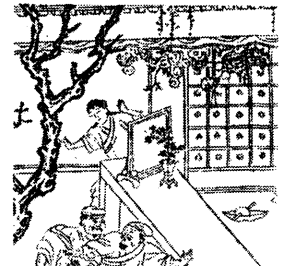


図7 生菓鋪 小座屏風

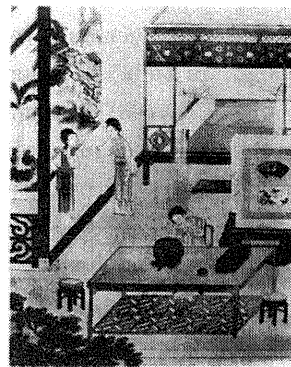


図8 座屏風



図9 軟屏(座屏風)

### 3. 『金瓶梅』にみえる屏風について

#### 3.1 形態による屏風の種類

屏風は、大廳などにおいて、広い場所を仕切るために陳設され、小座屏風は、桌上に配置される日本の衝立に類似した比較的小さい屏風であり(図4)、『明崇禎刻本挿図』に多く描かれる(図5-7)。図5は、孟玉樓邸大廳の桌上に陳設される桌屏(大理石屏風)である。

孟玉樓邸の様子は、7回の一節(…原來門面屋四間、到底五層。西門慶…。坐南朝北一間門樓、粉青照壁。進去裏面、儀門紫牆、竹槍籬影壁、院內擺設…。薛嫂推開朱紅隔扇、三間倒坐客位。…正面上供養着一軸水月觀音、善財童子、四面掛名人山水、大理石屏風、…)にみえる。大廳に屏風を陳設することにより、人の視線を調節する作用があることがわかる。また、図6は、西門慶の営む緞子屋の様子を示す挿図であるが、奥の帳簿の手前に屏風が陳設される。屏風により、人の視線を遮ることができ、小さな私的な場所が構成されている。また、図7は、西門慶が営む生菓鋪(菓屋)の様子であるが、桌の上に屏風が陳設され、花瓶に花が生



図10 幃屏

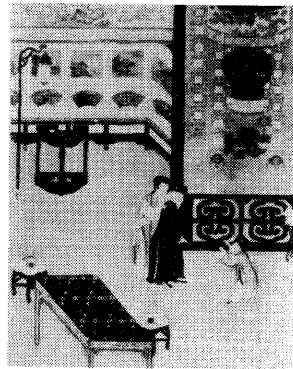


図11 圍屏



図12 吊屏



図13 吊屏

けられ、店内の装飾として陳設されている。小座屏風に属する屏風には、書案や書卓の上に陳設される桌屏(45回)や硯屏風、牀榻上に陳設される枕屏風がある。それぞれの形態は類似するが、陳設場所により名称は異なる。

座屏風(図8、9)や圍屏(図11)は、大廳や臥室などに陳設される比較的大型の屏風である。

座屏風は、底座と屏框で構成される大型の挿屏式の屏風であり、形態上の特徴から、日常的に、場所を仕切り、視線の遮蔽或いは風除けを目的とされる。

一般的に軟壁は、布製の屏風を意味するが[13]、大廳の様子の記事、20回の一節(…都在大廳軟壁後廳觀)や35回の一節(…單說潘金蓮從房裏出來、往後走、剛走到大廳後儀門首、只見孟玉樓獨自一個在軟壁後廳觀。…)、愛月院(妓樓)の様子の記事、59回の一節(門面四間、到底五層房子。轉過軟壁、…)より、「軟壁」は、その用材は布製とは限らず、障壁(影壁)に類似する「建築的隔」であると考えられる。

また、「軟屏」は、屏障用の幃幕とあるが[14]、29回の一節(…李嬌兒、孟玉樓、潘金蓮、李瓶兒、孫雪娥等衆人都跟出來、在軟屏後潛廳。…)の挿図にみえる「軟屏」は、座屏風を示している(図9)。

圍屏は、多扇の折疊屏風であり、別名は折屏である[15]。

幃屏は、38回の一節(那一曰把角門兒開着、在房內銀燈高點、靠定幃屏)にみられる。これは、金蓮が屏風によりかかり琵琶を弾く様子である(図10)。この幃屏は、屏隔、半屏であり、挿図より、低い圍屏であることがわかる。幃屏は寝所を示す語彙でもある[16]。

また、71回の一節(但見屏開孔雀、褥隱芙蓉…桌椅鮮明、幃屏齊整)は、何千戸邸(宦官何大監の甥)へ西門慶が酒席に招かれた室内の様子であるが、この幃屏は明らかに圍屏である。

また、圍屏は、15回の一節(…臨街樓上設放圍屏卓席、懸掛許多花燈)にもみえる。元宵節の宴席に陳設された屏風であることがわかる。圍屏を陳設することによ

り、非日常的な場所が構成される。

吊屏は、粉箋吊屏(34回)、吊屏兒(37、77回)、吊屏(67回)にみえるように、室内装飾のために壁に吊る、書画長条をいう(図12、13)。粉箋とは、古代の加工紙である。各様顔色綾段剪貼の張生遇鶯鶯蜂花香の吊屏兒(37回)は、『西廂記』の故事画(蝶恋花図案)であり、室内正面の方卓上に掛けられた画屏である。

これらより、座屏風は、主に常設される屏風であり、圍屏の陳設は一時的、季節的であり、非日常的な場所が構成される。

### 3.2 用材による屏風の種類



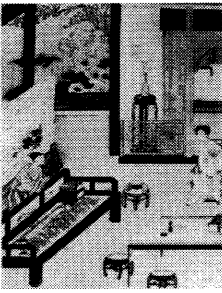


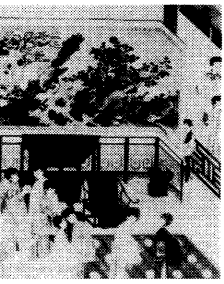




大理石屏風は、7回(前述)や45回の一節(西門慶與伯爵撇下雙陸、走出來着。原來是三尺闊、五尺高、可卓放的螺鈿大理石屏風。端的是一樣黑白分明。)にみえ、『長物志』の一節(大理石出滇中。白若玉、黑墨為貴。)の記録より、黑白がはっきりしているものが値打ちがあるとされる。

西門慶邸大廳に梵僧を招いた際には、桌上に條環様須彌座大理石屏風(49回)が陳設される。須彌座は仏像を載せる台であり、屏础(底座)の形状は、男性の身体が暗喩され、西門慶の生活様式が示されていると考えられる。雲母屏(30回)は、雲母質で表装された屏風であり、西門慶邸の聚景堂(30回)や妓樓の客間(59回)に陳設される。雲母は、古代において珍重された半透明の石であり、唐代の詩詞に多くみえる。李商隱の「嫦娥」の一節(雲母屏風燭影深、長河漸落曉星沉。…)は、天上の樓閣の幽深な様子である。雲母屏の陳設により、幽深な室内の場景が描かれる。

雲母障(15回)は、燈市の際、蠟燭を囲み、一種の燈品の役目をもつ圍屏である。

李瓶兒の夢にみえる、銀屏(60回)は、鏤銀屏風であり、銀が彫刻された屏風をいう。白居易の「長恨歌」[17]の一節(…珠箔銀屏暹迤開…)は、海上の仙山に建つ樓閣の室内の様子であり、真珠の簾、銀屏風が陳設される様子である。すなわち、銀屏が陳設され、非現実のさまを示すものと考えられる。何大監邸書房に陳

表1 役割・機能による挿図の分類

役割・機能		関連挿図	
装飾・分割・遮蔽	室内用途の分割	 妓院(11回)	 潘金蓮卧室(83回)
	視線の遮蔽	 吳月娘卧室(81回)	 妓院(98回)
装飾・権威・身分	身分・儀礼	 孟玉樓大廳(7回)	 西門慶邸正房(43回)
	仮設	 葵太師邸(18回)	 葵太師邸(55回)
装飾	装飾	 王婆茶坊(2回)	 西門慶邸大廳(45回)

設される倭金屏(71回)は、日本式描金屏風であり、美術工芸品として、非常に珍重された[18]。描金については、『日本考』倭考[19]の一節(按其日本所貢倭扇描金盒子類皆異物也…)にあり、扇、箱類など描金されたものが珍重されたことがわかる。

倭金屏は、日本より中国へ献上された屏風であり、別称「軟屏風」であり[20]、紙製などの圍屏の形態を「軟屏風」と称したと推察する。ただし、前述のとおり、『金瓶梅』に記述される「軟屏」とは異なる。

### 3.3 図案・紋飾による屏風の種類

九雷龍鳳宸(71回)は、何大監邸の場景にみえる皇帝の後屏であり、雷や斧の紋飾により権威が象徴される。陳設場所は何邸であり、斧の紋飾により、王座が示されるが、挿図には該当するものはみえない。その形態は、宸とは限らず、影壁に類似する「建築的隔」であるとも考えられる。

孔雀春風軟玉屏(74回)は、富貴の象徴である孔雀の紋飾である。軟玉は、明代(1637年)の産業技術書『天工开物』[21]の一節(凡玉璞根系山石流水。未推出位時、璞中玉軟如綿絮、推出位時則已硬、人塵見風則愈硬。謂世間琢磨有軟玉、則又非也。)にみえる。軟玉は、川の流れてできた白玉、緑玉である。ただし、64回の一節(…軟玉嬌香畢世間)にみえる「軟玉」は、上記とは異なり、女性の身体が暗喩される。一般に「玉屏風」とは、翡翠等の石で装飾された屏風であるが、55回の一節(…左右玉屏風)にみえる「玉屏風」は、美女たちの列を同回一節(屏風後列有二、三十個美女、…)の屏風(屏障)のように表象した語彙である。

龜背錦屏風(72回)は、王招宣邸大廳に陳設される。六角形の図案が亀の背文様に類似し、長寿の吉祥文様とされる。同時に、男性の身体が暗喩され、西門慶と林夫人との不義の関係を示すものと考えられる。

このように、用材、図案・紋飾により、登場人物の社会的身分や生活様式が表現されていることがわかる。

### 4. 挿図にみえる屏風の機能

挿図には多くの屏風が描かれる。大廳などの広い場所に屏風を陳設することで、「隔」すなわち、場所的「仕切り」となる。「仕切り」と類似し、視線から隠すための「遮蔽」、風などから守るための「風除け」、地位や権力を示すための背景、また、人生儀礼の場面にみえる屏風などをあげることができ、これらの用途すべてに装飾的役割がある。装飾のみの用途としての屏風は吊屏である。

挿図を用途により分類した一覧を示す(表1)。ただし、屏風は、厳密に用途別に分類できるものではなく、多くの用途をもって、陳設されることは明らかであり、「仕切り」や「遮蔽」など、すべての用途に室内装飾

としての役割がある。

屏風を「仕切り」として陳設された例は、妓院の客間、潘金蓮の臥室に見られる。妓院の客間においては、屏風と平頭案に類似する桌によって春檯（飯桌）は、分割される。

潘金蓮の臥室では、屏風によって、架子床と桌は仕切られる。妓院の屏風に描かれる文様はみえないが、潘金蓮臥室に陳設された屏風には花鳥画が描かれる。

視線の遮蔽として陳設される例は、吳月娘臥室、妓院であり、陳設場所は、牀の背後である。吳月娘臥室では、来保（亡西門慶の使用人）は、屏風と牀の隙間に隠れる様子がみえる。

人生儀礼の例は、孟玉樓大廳におけるお見合いの場景と西門慶邸正房における第六夫人李瓶兒の子官哥と喬太太家との縁組の場景である。描かれる孔雀は、牡丹などと共に富貴の象徴であり、太湖石には不死の願いがある。図案により、特別な儀式用であることが示される。また、人生儀礼の際に陳設される屏風の形態は、おもに圍屏であることがわかる。その折り畳み式という特徴により、陳設は一時的、季節的と考えられ、文様は、儀礼用の吉祥文様である。

背景としての屏風は、太師椅（圈椅）の背後に陳設される。文様は、人生儀礼と同様に吉祥文様がみえる（背景左図）。また、背後の屏風には障壁の役割がみえる（背景右図）。

装飾的機能のみをもつ屏風は、吊屏である。翹頭案の形態に類似する桌の桌上飾りである。

上記以外の機能として、進貢品としての「倭金屏」がある。その名称より、日本から明の皇帝へ貢献された屏風と考えられる。前述したように、倭金屏は、日本式描金屏風と考えられ、名称より、金箔が貼付された彩色風景画に類似するものであると推察される。

「倭金屏」は、豪商の西門慶邸には陳設されず、皇帝とつながりのある何千戸邸書房に陳設されていることより、皇帝との君臣関係の証として所有することができ、使用についての規律があるものと考えられる。

## 5. 屏風の名称による分類

『金瓶梅』にみえる屏風を記述される名称表記により、形態、用材、陳設場所（位置）、図案・紋飾に分類した（表2）。形態は、小座屏風、座屏風、圍屏、吊屏の4種類に分類される[22]。

大理石、雲母石を用材とする屏風の形態は、おもに座屏風であり、表1にみえる室内用途の分割、視線の遮蔽などの機能をもつと考えられる。また、図案紋飾に分類した屏風は、その図案より権威・身分が示され、儀礼あるいは非日常的な場所を構成するものである。

表2 『金瓶梅』の記述にみえる屏風名称の分類

分類	屏風の名称( )は『金瓶梅詞話校註』章回数
形態	圍屏(10、15)、石崇錦帳圍屏(21)、粉箋吊屏(34)、吊屏兒(37、77)、幃屏(38、71)、座屏風(45)、軟壁(59)
用材	大理石屏風(7)、雲母障(15)、雲母屏(30、59)、大螺鈿大理石屏風(45)、螺鈿描金大理石屏風(45)、條環様須彌座大理石屏風(49)、銀屏(60)、錦屏(69)、倭金屏(71)、孔雀春風軟玉屏(74)
陳設場所	桌屏(45)
図案紋飾	屏開孔雀(30)、各様顔色綾段剪貼的張生遇鶯鶯蜂花香の吊屏兒(37)、玉屏風(55)、九雷龍鳳辰(71、91)、龜背錦屏風(72)

## 6. まとめ

以上のように『金瓶梅』の記述とその挿図を資料として、「隔」の要素として、屏風について考察を行い、おもに以下のことが明らかになった。

- (1)「屏風」の起源は、権威の象徴を示す後屏であり、障壁としての機能をもつ壁、身を守るための武具であったと考えられる。しかし、明代の屏風は家具に属するものであり、挿図に一部「建築的隔」がみえるが、武具的な機能はみえない。
- (2)『金瓶梅』に記述される屏風を示す別称表記は、「宸」、「障」、「軟壁」である。「軟壁」は、一般的に布製屏風を示す語彙であるが、『金瓶梅』では、その用材は布製とは限らず、紙製、木製等が考えられ、障壁としての「隔」であると考えられる。
- (3)『金瓶梅』にみえる「軟屏」は、座屏風を示しているが、明代に日本より献上された日本式屏風「軟屏」とは異なる。
- (4)屏風は、形態により、小座屏風、座屏風、圍屏、吊屏に分類される。薬店の看板の形態は、座屏風の形態に類似し、『清明上河図』の薬店の看板に共通性がみえる。『金瓶梅』に記述される名称表記により、座屏風の用材は大理石や雲母石が珍重されたことがわかる。儀礼時に陳設される圍屏は、その性質上、描かれる図案が重視された。
- (5)屏風は、美術工芸品として重要視され、その数量によって富裕層であること及びその家の権威性が示される。
- (6)屏風の形態、用材、図案・紋飾により、それぞれの場所の特性が構成されるとともに、登場人物の社会的身分や生活様式が表現される。また、使用に関しての社会規範がみえる。

## 謝辞

本稿の作成にあたり、北海道大学名誉教授・中野美代子氏、佛教大学文学部中国学科教授・荒木猛氏より貴重な資料と助言をいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

### 参考文献および注記

- [1] テキストとして『金瓶梅詞話校註』、白維国ト鍵校註、岳麓書社、1995を第一次資料と使用した。
- [2] 清宮皇子の教育用とされる清宮宮廷秘蔵『清宮珍宝函美図』および明崇禎刻本挿図として、瀧本弘編『金瓶梅/紅樓夢挿画集』、遊子館、2003を参照・使用した。挿図は、当時の様相を総合的に示す貴重な資料である。
- [3] 動詞「へだてる(隔)」の連用形の名詞化された「隔(へだて)」を使用する。『日本国語大辞典』、p. 635、小学館、1978(昭和53年)
- [4] 『論語 孟子 荀子 礼記』竹内照夫訳 p. 465、平凡社、1970
- [5] Wu Hung 『屏風のなかの壺中天』、中野美代子、中島健訳、青土社、p. 10、2004
- [6] 聶崇義集『析城鄭氏家塾重校三禮圖』、上海涵芬樓影印宋刊本、商務印書館、1936、中華民國25年6月初版、京都大学文学研究科図書館所蔵
- [7] 黼は、柄のない斧文様の屏風であり、その文様は、あっても用いないことが示される。『和漢三才図会』5、寺島良安ほか訳注、p. 263、平凡社、1986参照
- [8] 崔豹撰『古今註』上海涵芬樓影印宋刊本、1936、京都大学文学研究科図書館所蔵
- [9] 「影壁」に類似する形態として「ヒンプン」や「屏風石」がある。琉球地方にみえる「ヒンプン」は、中国福建省の屏風「pin-hung」を源流とし、「魔除け」および「遮蔽」の機能をもつと考えられる。また、鹿児島知覧の武家屋敷にみえる「屏風石」は琉球地方の「ヒンプン」の影響を受け、「遮蔽」および外敵から身を守る「楯」としての役目がみえる。
- [10] 白川静『字通』、平凡社、2003
- [11] 『李明仲營造法式』第二冊法式卷六至十二 小木作制度は、建築技術のうち、門や窗について記述される。
- [12] 胡德生『中国古代家具』、pp. 51-61、上海文化出版社、1992

- [13] 『現代漢日辞海』、p. 2593、北京大学出版社、1999
- [14] 前掲[1]、『金瓶梅詞話校註』、p. 801
- [15] 文震亨『長物志図説』、海軍田君注釈、pp. 284-285、山東書報出版社、2004
- [16] 字通、平凡社、2003
- [17] 『白居易』高木正一注、pp. 92-115、岩波書店、1997
- [18] 前掲[14]、p. 272 および p. 283、倭(日本)の黒漆、金銀片について、値打ちがあるとの記述がみえる。
- [19] 『日本考』椽明萬曆刻影印、p. 13、京都大学文学研究科図書館所蔵
- [20] 郎瑛撰『七修類稿』、p. 476、上海書店出版社、2001 『建築大辞典』では、「室町時代に中国へ輸出した日本式の屏風を軟屏風といい、それに対して中国式のもの硬屏風と呼称した」とあるが詳細な構造の違いによる区別についての論拠は明確でない。『建築大辞典』第2版、彰国社、1997
- [21] 宋応星(明)『天工开物』、pp. 208-212、兰州大学出版社、2004
- [22] 中国明式家具学会の先駆者である、楊耀は形態により、鏡屏、插屏、圍屏に分類した。王世襄は、座屏風、圍屏、小型座屏風(几案上小屏風)の3分類とし、胡德生は、折疊屏風、插屏風、挂屏風に分類した。楊耀『明式家具研究』、p. 41、中国建築工業出版社、1991 王世襄『明式家具研究』、pp. 84-87、1989 胡德生(故宮博物院研究員)『中国古典家具』、pp. 51-61、1992
- ### 図版出典
- 図1、2《小雅鹿鳴之什》、12世紀 北京故宮博物院蔵の紙本画卷、Wu Hung 『屏風のなかの壺中天』、中野美代子、中島健訳、青土社、p. 10、2004
- 図3「宸」(三禮圖) 筆者模写
- 図4「明黄花梨木挿屏式小座屏風」莊貴命主編『明清傢具集萃』、p. 111、兩木出版社、1998
- 図5-6 瀧本弘編『金瓶梅/紅樓夢挿画集』、遊子館、2003 図7-10、表1の挿図『清宮珍宝函美図』

本稿は、日本建築学会計画系論文集No.607(2006.9)に発表した原稿を加筆修正したものである。